

ス(A) まい倫理号です。倫理ボケとは何なり？ グラフィックデザイン
感動かうすいふ時かあふれ、早うろにうかいて良から、あかろう！

三月のテーマ 慣れた時こそ

倫理ボケ

丸山竹秋

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所会長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のこぼれを掲載します。



え・たむらかづみ

知

覚がにぶること、ぼんやりすること、もうろくすることを「ぼける」と言う。倫理ボケとは、倫理について知覚がにぶり、ぼんやりした状態にあることで、これは政治、経済、その他についてもひろく言える。

新聞など、毎日のように倫理という言葉が出てくる。政治倫理、生命倫理、医療倫理、経済倫理、教育倫理、道義的責任、その他一日のうち、どこかに倫理（道徳、道義）という言葉の載っていない日はない。しかし、それだけ倫理的になっていくか、どうか。あまり多く使われるので、ボケているのではないか。「またか」というわけで、新聞に書かれようが、テレビ、ラジオなどでいくらか叫ばれようが平気になってしまう。

いわゆる倫理運動をおこなっているとして、倫理という言葉がやたらに多いと、人によってはその言葉になれてしまい、無神経、無感動になつたりする。ああ、また倫理か」といったような、馬鹿にしたようなぐあいである。まさに「倫理擦れ枯らし」である。

実践はやらないでボケツとしていく。だから実践体験も出ない。そして他人の批判ばかりしている。自己自身への反省はない。いわゆる倫理の経歴が古い人ほど、そうしたボケになりやすい。

真理がある面において追究するものが学問であるが、学問ボケというのがある。定期的に学校にゆき、教壇に立ち「学問、学問」と言っている、いつしか慣れて新鮮味を失い、追究心がうすらいでゆく。つまり自分の学問にボケが始まったのである。学問、学問とあまり言わない人の中にも、真の学者がいる。本居宣長、南方熊楠などはその道の学校すら出ていない。しかし生涯を通じて、学問に打ち込んだのであった。

総じて先生と人からも言われ、自分もそう思っている人は危険である。教える立場からの反省として見れば、だいたい先生と呼ばれるだけの資格のある人は、厳密に言うといないのだ。みんな生徒であり、学生なのである。「先生」と呼ばれたら、内心ふるえがくるようでなくてはいけない。いい気になっていくと謙虚さ

をなくし、先生擦れ、先生ボケが始まるからである。

前にもどって、生活倫理を学ぼうとし、また学んでいる人は、すぐにこの倫理ボケが始まることを警戒する必要がある。新鮮さを感じなくなつたとき、感動がうすくなったときが、あぶない。先輩とか先生と言われたすと、いよいよ危ない。

あの孔子でさえ、孔夫子と呼ばれることを喜ばず、「また生（この世）のことさえよく知らないのに、どうして死のことを知つていようか」とあくまで謙虚であった。

「論語読みの論語知らず」と言うが、「論語」の内容など、同じところを何度読んでも味わいはつきないと思う。「論語」を、一回りか二回り走り読みをして、「もうわかった」などと感激をなくしたときが「論語知らずの論語ボケ」となる。

同じように『万人幸福の菜』読みの『菜』知らずで、『菜』ボケの人が、いつでも増えつつあるのではないか。自分自身の内容をしっかり見つめ直そう。

（月刊『新世』一九九三年八月号より）